

巻頭言

# 阪神・淡路大震災30年 アーカイブス映像の可能性

NHK 大阪放送局コンテンツセンター第2部記者

藤 島 新 也

私が勤務する NHK 大阪放送局の13階には、大量の映像テープが保管されている部屋がある。その奥で、特に広いスペースを占めているのが、阪神・淡路大震災に関する取材テープだ。長年ひっそりと保管され、眠ったままになっていたこうした映像を活用できないか。今、トライを続けている。

この30年で震災の経験者の高齢化が進み、神戸市は職員の約7割が「震災を経験していない世代」になったと聞く。メディアも状況は同様で、私の職場も30歳以下の記者が半数だ。かくいう私も当時は8歳。黒煙の上がる神戸の街を映した空撮や、倒壊した阪神高速の映像、小学校で折り鶴を折って被災地に送ったことは覚えているものの、静岡県で小学校生活を送っていた私にとって、震災はテレビの中の話で体感は伴っていなかった。その意味で私も「震災を経験していない世代」に近いと思う。



写真1 保管された大量のテープ



図1 災害記録マップ 阪神・淡路大震災のページ

こうした状況の中で震災にどう向き合い、伝えていけば良いのか。悩みながら、仲間とともに立ち上げたのが「あのとき、ここで、なにが。災害記録マップ 阪神・淡路大震災」というWEBサイトだ。保管庫で眠ったままになっていた映像を、撮影された場所に応じて、地図の上にプロットして表示したサイトで、どこで、どんなことが起きていたのかを知ることができる。放送局の持つアーカイブス映像の公開では、朝日放送グループが運営している「阪神淡路大震災 激震の記録1995 取材映像アーカイブ」が知られている。このサイトの「映像が伝える教訓を広く共有し、後世に伝えたい」という思いには、強く共感する。

サイトの公開に向け、NHKに保管されていた映像をひとつひとつ見ていくうちに、これまで私の中にあったイメージとは異なる震災の姿に気づくことになった。家族の無事や避難先を書いた紙をビールケースに貼り付けてその場を離れる人たち、屋外に並んだ黒電話を使って連絡を取る大勢の人、壊れた家具を薪にしてたき火をして暖をとる避難者たち。大阪・梅田の献血バスには「少しでも力になりたい」と長蛇の列ができ、食料や水を背負った人たちが西宮北口行きの阪急電車に乗り込む。映像に写った当時の人たちの姿はリアルで、30年前に起きた震災が、自分と地続きの世界で起きたことなのだというのを強く感じさせた。こうした映像を1人でも多くの人に見て欲しい。これまで過去の映像の公開については、その可否を判断する明確なルールが無かったが、今回、NHKの放送ガイドラインや、デジタルアーカイブ学会が公表している「肖像権ガイドライン」などを活用し、慎重に検討しながら公開作業を進めている。

サイトの公開に合わせて、その「活用」についても模索を続けている。その1つが「上映



写真2 上映会の様子

会」だ。2023年12月には神戸市長田区の御蔵小学校を会場にして開催した。御蔵小学校は30年前に避難所となり、一時、3,000人近くが避難生活を送った場所。今も当時と同じ校舎が使われている。

神戸市にも協力を頂き、図書室をお借りして、当時避難していた住民、対応にあたった学校の教員や市の職員、震災を経験していない現役の神戸市の若手職員など19人に参加してもらった。車座になり、震災発生から約2週間にNHKが記録してきた御蔵小学校の様子を見てもらった。ナレーションも、テロップも、音楽もない、約30分の映像だ。

地震当日の夜、御蔵小学校では、暗がりの中、食料配布に大勢の人が並んで騒然としていた。食パンを袋から素手で取り出して渡すシーンには「こっちにもちょうだい」といった切実な声が入り、「これしかないので、すみません」と謝る担当者の様子も映っている。映像を見た当時の担当者は、途中で食材が不足することに気づき、裏でこっそりバナナやパンを半分にして配ったこと、地域の人が「我慢せえ」と言ってくれて場がおさまったことなど、映像には写っていない当時の対応の様子を語った。神戸市の若手職員からは、十分な食料がない中で配布方法をどう決めたのかといった質問が出て、災害直後の対応をめぐって意見を交わす場面もあった。また、ご近所付き合いが減り、顔の見える関係が築きにくい現状を危惧しているというOB職員の意見に対し、若手職員から、新たなコミュニケーションツールの登場で物理的な距離を飛び越えて連携できるメリットもあるといった意見も出て、上映会は盛り上がった。個人的には、参加したある若手職員が「当時と同じような対応ができるかは、正直自信がない」とつぶやいたことが印象に残っている。映像を通じて当時の様子をリアルに感じ、自らが対峙する災害イメージの解像度が上がったか

らこそその感想だったと思う。その若手職員は上映会の最後に「マニュアルをつくり、なるべく同じような対応をどこでも出来るようにするのがベストだと思っていた。でも必ずしもそうではないとわかった。誰のために、何をするのかを考え、臨機応変に対応することが大事だと思った」と話していた。

ふだんメディアで働く私たちは、「伝えたい」「伝えなければならない」と感じることを取材し、発信する。多くの人に話を聞き、現場を見て、資料を調べ、鋭い検証や心を動かす番組を作ることの大切さは不変だ。一方で、それに合致しない映像は社内に眠ったままになっていた。ただ、視聴者の中には「知りたいのはそこじゃない」「もっと別の視点の映像も見たい」といったニーズがあるはずだ。心が動かされる映像も人によって異なるだろう。だからこそ、メディアが当時の映像を抱えたままにしておくのではなく、広く公開して、多くの人に見てもらいたいと思う。アーカイブス映像によって、震災をリアルに、身近に、感じてもらう。それが「震災を経験していない世代」が増える中でも、教訓をしっかりとつないでいくことにつながるのではないか。震災30年は、そうした新たな災害報道へのトライを続けたいと思っている。

## 参考文献

- 1) NHK『あのとき、ここで、なにが。災害記録マップ 阪神・淡路大震災』  
<https://www.nhk.or.jp/bousai/archives/01110/>
- 2) NHK『29年後の上映会 アーカイブス映像でつなぐ阪神・淡路大震災の記憶』  
[https://www3.nhk.or.jp/news/special/saigai/select-news/20240112\\_01.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/saigai/select-news/20240112_01.html)
- 3) ABC『阪神淡路大震災 激震の記録1995 取材映像アーカイブ』  
[https://www.asahi.co.jp/hanshin\\_awaji-1995/](https://www.asahi.co.jp/hanshin_awaji-1995/)